水利用からみる京都岡崎の文化的景観の構造

はじめに　景観研究室では、2010年度より京都市との受託調査研究として、東山山麓の岡崎地区を対象に、都市域の文化的景観の価値評価と保存計画策定のための調査を実施している。洛中・京都の近郊に位置する岡崎は、時代を隔てて２度大規模な都市開発が行われた。１つは平安時代後期の法勝寺にはじまる六勝寺の造営であり、もう１つは明治23年（1890）の琵琶湖疏水をはじめ、明治28年（1895）の平安遷都千百年紀年祭および第４回内国勧業博覧会を契機とする近代都市開発である。その後、博覧会跡地整備によって岡崎公園が誕生し、京都における文教地区である今日の岡崎に至る。

問題の所在は、連綿とした歴史の中で変化し続ける岡崎の都市景観を、自然風土と人間の相互作用によって形成された「文化的景観」として如何に読み解くか、にある。本稿では、地形と水利用に焦点を当て、岡崎の文化的景観の構造をあきらかにすることを目的とする。

基層となる白川扇状地　岡崎の文化的景観の基層となるものは白川がつくりだす扇状地の地形・地質である。「岡崎」という地名は、神楽岡（吉田山）の崎に位置することに由来し[1]、岡崎の地形的特徴を端的に表している。

比叡山を水源とする白川は、吉田山に流路を遮られて南流し、東山山麓を深く浸食しながら流れ出て、北東から南西へと緩やかに傾く扇状地を形成する。東山山麓の中でも比較的広い平坦地は、白川や地下を流れる豊富な伏流水によって満々と水を湛え、時代を通底して岡崎の土地利用の源となる。

地形改変と都市形成　岡崎の都市空間の起源は平安時代に由来する。平安時代後期に平安京の条坊を延長し、雛壇状に地形を造成して六勝寺の巨大寺院群ならびに白河市街地が形成された。法勝寺は広大な園池を有していたが、これは白川が形成した扇状地の地質と水によって誘発された土地利用といえる。

応仁の乱後、六勝寺は廃絶し、六勝寺の跡地は岡崎村をはじめとする都市近郊農村と化すが、原地形改変をともない形成された条坊制のグリッドパターンは、地形同様、その後の農地利用の前提条件として作用する。図24は、明治16年（1883）の土地利用[2]を復元し、さらに平安後期の白河街区推定復元図[3]と江戸中期の南禅寺境内範囲[4]を付加したものである。農地の畦道や用水路は条坊地割と見事に対応していることがわかる。発掘調査で白河市街地の主要街路の側溝が検出されており、六勝寺衰退後もその溝を踏襲した水路ネットワークが形成されたと考えられ、条坊制の街路と宅地割が残存し、都市的土地利用から農地利用へと転換する下地となったといえよう。

明治に入り、東京遷都によって衰退した京都の再生策として実施された琵琶湖疏水開発は、一面畑地広がっていた岡崎の景観を大きく変貌させた。近代と前近代を断絶した歴史として捉えられがちな琵琶湖疏水開発であるが、図24・25を見ると、琵琶湖疏水のルートは、扇状地の微地形と既存市街地を縫うように二度屈折するルートに設定されており、琵琶湖疏水開発の先行条件として作用している。扇状地の原地形に琵琶湖疏水開発という大規模土地改変が加わる事で、自然水系の白川と人工水系の琵琶湖疏水が織りなす水脈が誕生し、従来、白川によって支えられてきた水利用から、舟運、水車動力、水力発電、庭園用水などの多目的水利用へと転換された。

領域と水利用システム　岡崎を縦横に流れる白川と琵琶湖疏水は、扇状地の微地形とあいまって、複合的な水利用を誘発しモザイク状の市街地を形成する（図25）。

東山山麓の南禅寺旧境内では、庭師小川治兵衛らによって近代和風の建築と園池庭園からなる別邸群が形成される。この一大庭園群は、山裾を北上する琵琶湖疏水分水から取水して庭どうしを結ぶ水路ネットワークを形成し、疏水本線である鴨東運河へと流れ込む。文化施設が集積する岡崎公園や京都市動物園は、鴨東運河によって縁取られ、疏水それ自体が広大な水面となって親水空間を形成する。岡崎道をはじめ条坊制に由来する街路構造は、岡崎公園の敷地割を規定すると共に、法勝寺の苑池式伽藍を換起させる平安神宮神苑など、大規模な空地と苑池をもつオープンスペースを持続させる。鴨川手前の夷川船溜周囲には、水車と水力発電を利用した精米、精粉、伸銅など諸産業が集まる工業地帯となった。

文化的景観の持続的変容　変化しながらも持続する岡崎固有の景観の特性を、領域の土地利用システムとして捉えよう。岡崎は、東山山麓の扇状地を基盤に、白川と琵琶湖疏水の水利用によって都市空間を形成してきた。地

形・水系が密接に結びついた土地利用の仕組みは、都市の発生から現在に至るまで、連続して岡崎の景観を規定し続けている。

現在、京都市と共同で、岡崎地区の重要文化的景観選定に向けた保存計画の策定作業を進めている。文化的景観は自然風土と人の暮らしが維持される限りにおいて一定の変化を許容する必要がある。そのため、都市の履歴を丹念に読み解き、長年に渡って育まれた土地利用の持続的仕組みを見出すことが、文化的景観の価値を保ちつつも時代に即した変化を遂げていく動的な保全へと通じる手がかりとなるだろう。

（松本将一郎）

註

1）地名編纂委員会編『角川日本地名大辞典 26京都』2009。
2）「従滋賀県近江国琵琶湖至京都通水路目論見実測図」（明治16年［1883］製図、琵琶湖疏水記念館所蔵）を元に作成。
3）堀内明博『日本古代都市史研究―古代王権の展開と変容』思文閣出版、2009を元に作成。
4）櫻井景雄『南禅寺史 上』法蔵館、1977を元に作成。
5）京都市文化市民局『京都市内未指定文化財庭園調査報告書　第一冊岡崎南弾寺界隈の庭の調査』2012を元に作成。

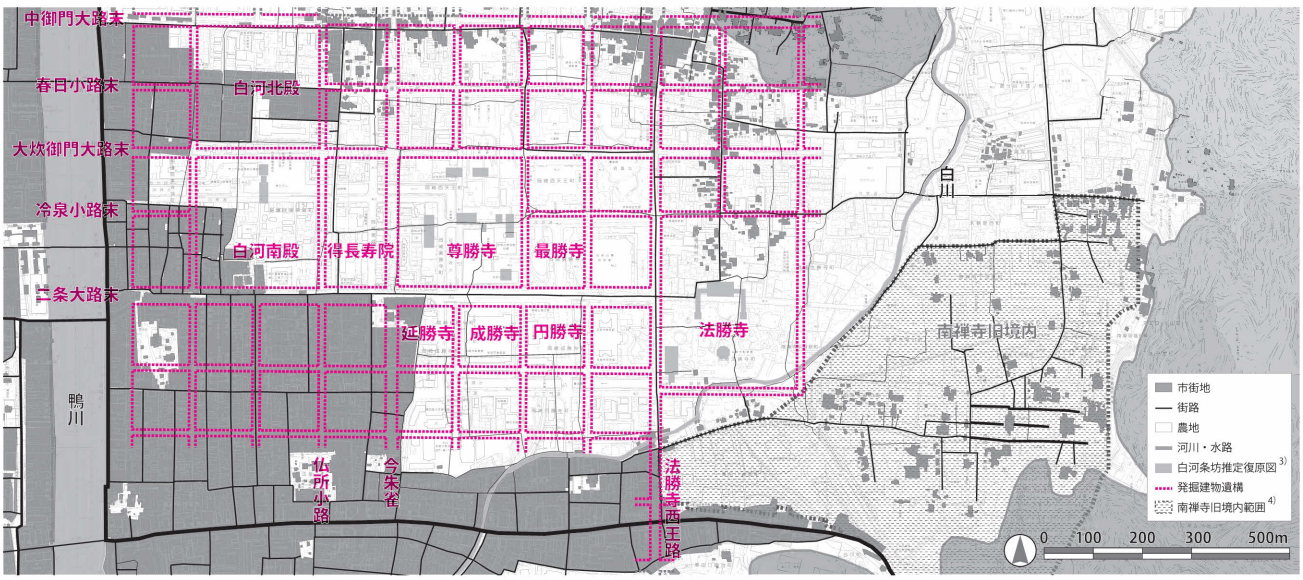

図24　明治16年（1883）琵琶湖疏水開発前の岡崎

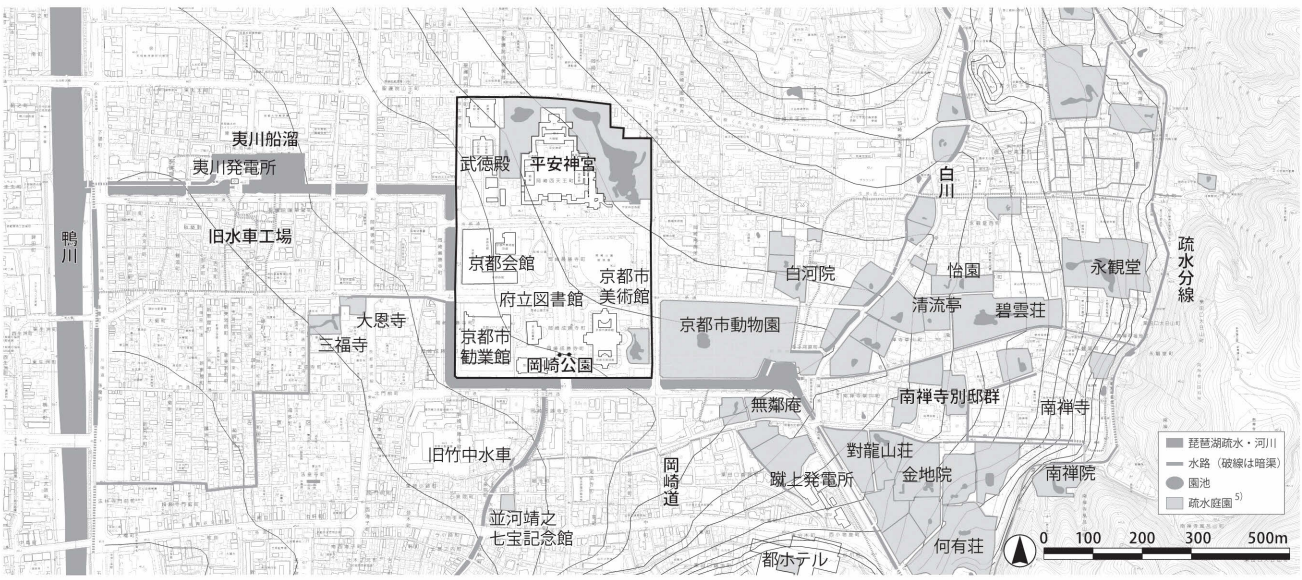

図25　現在の岡崎の地形・水系と土地利用